

サウジアラビアの近代化における New Middle Class の役割

高林幸裕

はじめに

サウジアラビアにおける急激な近代化に対して伝統的価値観を破壊し、サウジ社会の混乱を引き起こすものと警鐘を鳴らす学者は多い。事実、伝統勢力をブロックし、国造りを完全な西欧化という形で推進していたシャー王制が1979年、ホメイニー師を中心とするイスラーム革命によって打倒されたとき、西欧の多くの学者たちは、次はサウジか、との声を強めた。

しかし、予想に反して現在までサウジ王制は打倒されていない。サウジ王制の国造りはイランのシャー王制下における国造りと異なるのであろうか。筆者は現サウジ王制の国造りの方向性を読むにあたって、近代化の産物であり、また担い手である New Middle Class (以下、NMC と略す) のイスラーム意識、近代化の理想について分析することがこの問いかけに答える重要な鍵となると信ずる。サウジアラビアの NMC は、伝統的価値観と全く相反する存在なのであろうか。彼らは世俗的な教育を受けることによって西欧化こそ国造りの理想と思っているのであろうか。彼らはイランで起こったことをもう一度繰り返そうと望んでいるのだろうか。それとも彼らは、近代化に伝統的価値観をいかに積極的に活かすかという

ことが、物質主義、個人主義により西欧諸国が現在陥っている苦境から脱する唯一の方法だと認識し始めたのだろうか。

この論文では、まず政治的、経済的近代化による社会構造の変化と意義について分析する。その次に、社会構造の変化の一環として登場した NMC のイスラーム意識、国造りの理念、政治に対する態度について述べる。NMC は近代化の理念に関する部分で政治化する可能性はあるのか、あるとすれば今後サウジ王制がどのように近代化を推進した時であろうか。この論文は今後のサウジアラビア近代化の方向を探る試みである。

I 近代化による社会構造の変化

近代化は古いもの、遅れているものを新しい優れたものに改善していく過程である。人間の究極的な理想が幸福になることだとしても、そのためには生活水準の向上とか、平和で民主的な社会で自由と平等が保障されているとか、精神的にも満足できるといった各局面の条件が満たされていなければならない。これらは経済の近代化、政治の近代化、社会的近代化など人間生活のいろいろな局面の近代化によって、そしてそれらの総合によって実現される。重要なことはこの総合がバランスのとれたものでなくてはならないということである。

サウジアラビアにおいて政治的、経済的近代化が最も急激に推進されたのは言うまでもなくファイサル王治世下（1964—75）においてである。¹⁾ 経済的な発展については、約50倍に膨張した石油収入がその要因である。この財源をもとにファイサルは、インフラストラクチュアの開発を重点的に国造りを推進した。サウジアラビアの健全な発展のために、非石油部門の生産力を高めるための土台作りとして、1970年から第一次五か年計画が開

始されたが、政府支出はその間に約6.6倍にも膨れ上がった。このような急激な開発計画を推進するにあたり、問題となったのがマンパワーの問題である。サウジアラビアには熟練労働者は不足しており、新規労働者は村落地域からの移入、あるいは労働者の自然増にも期待されたが、主な労働力は外国からの出稼ぎ労働力に頼るところが大きかった。政府は「人的資源の開発」を五か年計画の基本目標の一つとして教育、訓練の振興にも努めたのであった。

この急激な経済発展の中でサウジアラビアの伝統的部族社会は、構造上どのような影響を受けたのであろうか。この章ではまず、弾力的社会であり、しかもサウド家という一部族が支配階級を形成していたというサウジアラビアの伝統的社会構造の特殊性について述べた後、社会構造の変化について分析する。

1 サウジ伝統的社会構造の特殊性

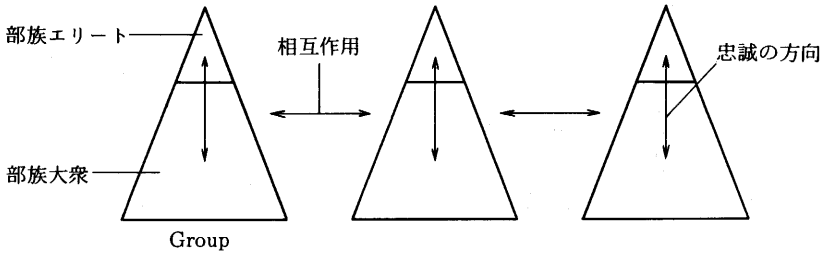
議論を進める前に、この論文の中で使用される class (階級)、group、stratum (階層)の概念の定義をしておく必要がある。言うまでもなく、社会構造における class 概念は西欧の工業化社会を分析するために考え出されたものである。マルクスは富の所有などの経済的要因をパラメーターとして社会構造を上流、中流そして下層階級に区分し分析した。しかし、伝統的サウジ社会においては、相手にいかに影響を与え、抑制できるかという権力の源泉は富だけでなく、政治的、経済的、社会的、教育的、宗教的そして精神的システムの中に見出すことができるのである。²⁾ 西欧工業化社会と全く異質な伝統的サウジ社会を分析するために、筆者は以下のようにclass、group、stratum を定義する。一定のルールを持ち、同じイデオロギー、目標、価値観により形成された集合体を group と規定する。これに対して group を超えて社会全体的に同じ価値観を持ち、権力の源泉の

差はあれ、同程度の権力水準にあり、その集団に対して強い帰属意識が生まれている集団を class、その一段階前のやや曖昧な状態を stratum と規定する。ここで定義された class は以下に述べられる伝統的社会構造の変化により、今まさに現出しつつある社会階級を意味し、マルクス流の class とは全く異なる。

サウジアラビアの伝統的社会構造を分析するには、部族エリートと部族大衆の権力関係による分析が適当であると思われる。この場合、権力の源泉は経済的要因に限らない。また、少数ではあるが部族社会には属さない役人、ウラマー、教師、商人から成る Middle Class、大商人などの Upper Class が既に形成されていたことも事実である。この場合の class は職業により区分したという点でマルクス流の class 概念に似ているが、彼らは伝統的サウジ社会全般にわたって存在していたわけではなく、ここでは部族社会と区別するために便宜的に用いた。

伝統的サウジ社会の大部分を構成する部族エリート、部族大衆は、それぞれの集合体の中の水平的なつながりよりも部族意識で形成された部族という group の中で、部族大衆の部族エリートに対する忠誠という垂直的なつながりで結ばれている。この部族意識による結合はアサビーヤと呼ばれ、伝統的部族社会は個々のアサビーヤから成る部族 group の相互作用によって成り立っている。また、アサビーヤによる group 以外にも家族、宗教などの group が存在し、それぞれの group が部分的にオーバーラップし合いながら group 同志の緊張を保っている。また、group の内部においては、権力は部族エリートとの個人的関係によって上下する。つまり、group 内の権力は、族閥主義、フェイバリティズム、策動などをその源泉とするのである³⁾。このように伝統的サウジ社会は group 同士の相互作用と group 内部の権力関係が密接に絡み合うことによって成り立つ弾力的社会であった(図-1)。

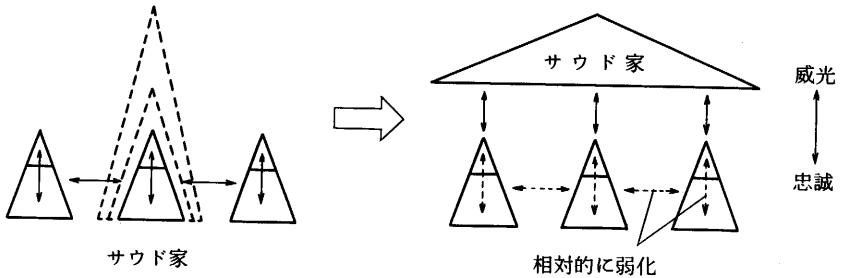
図-1 Group 内外の相互作用



伝統的サウジ社会のもう一つの特異性は、イブン・サウドによる国家統一によって形成された。すなわち、サウド家という一つの部族 group が他の諸 group との水平的相互作用関係から抜け出し、サウド家自身が超部族エリートになったことである。彼らは政治的、経済的、社会的ないかなる側面においても他 group の部族エリートよりも権力を持ち、しかも自分達が支配者であるという支配階級意識を持っていた。この意味で彼らは支配階級と呼ぶにふさわしい集合体であった。⁴⁾

このサウド家の支配階級化に伴って、その下に位置する諸 group の相互作用に影響が開始した。すなわち、それまで group 同志の水平的な相互作用と group 内部における垂直的な権力関係によって均衡が保たれていた社会構造が、水平的な相互作用を少しばかりは保ちつつも、group の相互作用の方向が王の威光、サウド家への忠誠という垂直的なものに変化したのである。王はその忠誠心をマジユリス（部族会議）を定期的に開くことによって徹底させていけばよかったのである（図-2）。

図-2 相互作用の変化



2 近代化による政治社会構造の変化

伝統的サウジ社会の人々にとってファイサル王治世下における近代化によって被った最も大きな変化は支配体制の変化であろう。ファイサル以前は国王の恣意的支配により、支配—被支配関係は国王の威光と国王への忠誠という非常にシンプルなものであった。それが官僚制、法律による規制、計画経済、宗教界の国家への統合というファイサル王の近代化により、支配体制はサウジアラビア国家へ移りつつある。

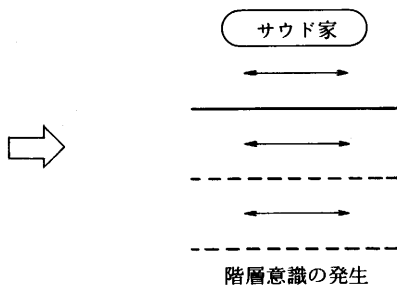
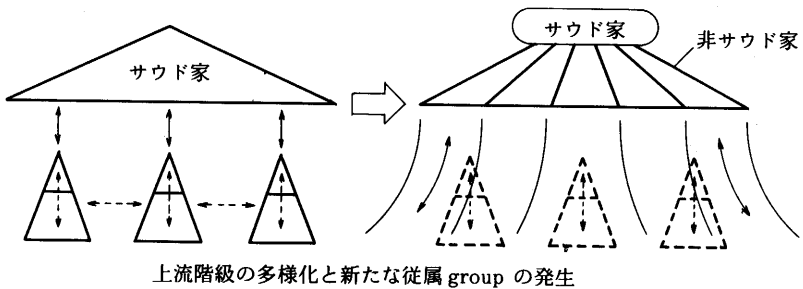
ここで注意しなければならないのは、国王から国家へと支配体制が移行する過程で、それまでサウド家のみに握られていた超部族エリートの権力領域に非サウド家による新たな上流階層が形成され始めたということである。この上流階層は近代化に伴う国内、国外のニーズの多様化、相互依存の複雑化に対して部族貴族、軍部エリート、経済エリート、土着地主、外国人資本家などに多様化している。と同時に、サウド家が支配体制に直接的に影響力を行使できる範囲は狭くなってきている。国王は政治体制を整備し、その中の重要な部分を掌握することによって間接的な社会影響力の

多元化、強力化をはかったのである。そしてここに非サウド家勢力が上流階層に入り込める余地が生まれたのである。彼らが上流階層へ引き上げられた契機は依然として国王との個人的関係によるものが多いが、次第に同じ階層に属しているという意識、親近感が彼らの間に形成されてきていることも事実であろう。この意味でサウジの上流階層は現在、多様化しながら、上流階級を形成しつつあると言えよう。

近代化により影響を受けたのは上流部分だけではない。残った部族エリート、部族大衆の中にもそれまでの忠誠を中心とする縦の関係よりも、次第に階層意識という横のつながりに芽生える者が現れてきた。伝統的職業に従事していた者が建設、貿易、工業を中心とした第二次、第三次産業に進出するようになってそれぞれの階層内における平等意識、似かよった価値観が形成されるようになった。この階層意識の形成は前述の上流階級の多様化にその原因を負うところが非常に大きい。つまり、それまでの部族意識から成り立っていた group においては中央権力の策動が可能であったためにどうしても group 内における従属関係が強く、階層意識には結びつかなかった。しかし、上流階級が多様化することによって各々の上流階級の下部に位置する従属 group が生じた。例えば、大会社の経営者の下に中間管理職、高級官僚の下に官僚、軍部高級官僚の下には将校といったようにである。これらの従属 group はその上部に上流階級を控えているが、両者の関係は部族内における部族エリートと部族大衆のそれとは異質のものである。そして部族内の強力な縦関係と異なる新たな縦関係が生じることによって、結果的に彼らの中には、同じ階層に属しているという水平的な階層意識が芽生えつつある。現在のところ、この階層群の中には、中流、下層という明確な区分はつけにくい。なぜならば、サウジアラビア自身、近代化の途中であるし、近代化が開始されてからの時間的経過も浅いからである。この階層分化が、従来からの縦の関係に全く影響されず、

階級の自立化という形態を生ずるまでには、さらに近代化が進行するのを待たねばならないであろう（図-3）。

図-3 階層意識の発生



近代化の影響を受けて芽生えつつある前述の諸階層の中に、他の階層とは明らかに権力の源泉の異なる階層が形成された。他の階層が依然として伝統的部族社会の族閥主義、策動により地位を獲得するのに対して、この新階層は世俗的、非伝統的な教育で得た専門的技術や知識により現在の地位にあるのである。⁵⁾

1957年にリヤド大学、64年にキング・アブドル＝アジーズ大学が、来た

るべきファイサルの近代化計画のマンパワーの供給源として建設され、外国への留学生も60年代後半から大量に増えた⁶⁾。彼らは卒業後、経営者、行政官、専門技師、事務官、教師、弁護士、科学者、軍部将校などの職業につくが⁷⁾ 彼らは富や個人的関係よりも功績や貢献によって他人と関係を持つのである⁸⁾。機会均等、職業意識という新たな階層意識により形成されているこの層は、表-1に示されているように近代化が進行するにつれて急激にその勢力を増しつつある。彼らの階層意識の特異さ、勢力の強さは階級と呼ぶにふさわしいものである。この形成中の新階級は、その権力の度合から見て既存の役人や商人からなる Middle Class と並ぶものである。よって、この新階級を New Middle Class と呼ぶことにする。

表-1 New Middle Class の増加

(単位千人)

年	1965	1970	1975	1980	1985
中級文官 (増加率%)	3.6	6.0 (67)	18.1 (202)	40.7 (125)	56.8 (40)
軍将校 (%)	5.6	6.0 (7)	7.0 (17)	7.4 (6)	11.1 (50)
教師 (%)	5.7	10.2 (79)	22.2 (118)	38.0 (71)	45.3 (19)
合計 (%)	14.9	22.2 (49)	47.3 (113)	86.2 (82)	113.2 (31)

(出所) Mark Heller and Nadav Safran, *The New Middle Class and Regime Stability in Saudi Arabia*,
Harvard Middle East Papers, Center for Middle East Studies,
Cambridge, Harvard University Press, 1985, p.10

表-2 サウジアラビアの労働人口に占める New Middle Class の割合
(単 位 千 人)

年	1965	1975	1980	1985
労働人口	712.8	1,026.4	1,190.0	1,379.5
New Middle Class	14.9	47.3	86.2	113.2
NMCの労働人口に占める割合 (%)	2.1	4.6	7.2	8.1

(出所) Heller, p.11.

Ⅱ 成長する New Middle Class

前章において近代化の産物としての NMC の出現について述べた。この章では、近代化の産物であると同時にこれからもサウジアラビアの近代化を担っていく NMC が、どのような近代化を理想とし、どのような状況において政治化するかについて分析する。このような NMC に関する分析は、ファイサル以降の現体制がいかなる方向へ国家建設を推進しているかを考える上で非常に重要である。同時に、近代化を推進していたイランのシャー体制が倒れたように、果たしてサウジアラビアも倒れるのかという stability の問題とも深く関わってくる。

さて、伝統的サウジ社会の垂直的社会構造が、近代化によって水平的な階層意識を形成する中で、NMC は権力の源泉を富や個人的関係でなく功績や貢献に求めてその階層意識を強めてきた。この功績や貢献は、NMC が高等教育を受けることにより獲得した個人的資格によるものである。このことから NMC の形成は教育の発展と深く関わってきたと言える。

次に、NMC の特性をサウジアラビアの教育制度の推移より検証する。

1 教育制度と New Middle Class

サウジアラビアの教育は、伝統的にウラマーによって行なわれてきた。最初に高等教育制度として確立されたのは、The Shari'ah Islamic Law College of Mecca (1949年)、Shari'ah College (1953年)や Arabic Language College (1954年)などであった。これらはサウジ国内の高校教師やイスラーム法官、弁護士を養成するために建設されたもので伝統的科目が重点的に教育された。⁹⁾ 世俗的科目は、わずかにヒジャーズ商人によって興された私立学校でのみ教えられていたにすぎなかった。エジプトの大学を模型とした初めての近代的大学がリヤドに建設されたのは、1957年になってからのことである。¹⁰⁾

リヤド大学建設以降、近代化の進行により移り行く社会の需要に応じ、教育の目的も変化してきた。当初は拡大する官僚機構に見合う人材を供給すべく、官吏を補充することがその目的であった。ある程度官僚機構に人材が補充されていくと、次に必要となったのは、それまで外国人労働者に頼っていた技術部門のサウジ人による運営である。それ故、科学的、技術的な教育に重点が置かれるようになった。このような教育は、それまでサウジアラビアには存在していなかったので、必然的に近代西洋教育が採用され、高等教育において主流を占めるようになった。また、近代西洋教育を教える教師はサウジ人だけでは足りないので、非サウジ人によって大半が占められている (表-3)。

表-3 サウジアラビアの教師構成

(1975/76年、1980/81年)

年	サウジ人		非サウジ人		合 計
	人 数	%	人 数	%	
1975/76	25,101	49.0	26,075	51.0	51,176
1980/81	44,768	52.0	41,309	48.0	86,077

(出所) J. S. Birks and J. A. Rimmer, *Developing Educational System in the Oil States of Arabia: Conflicts of Purpose and Focus*, Durham :Univ. of Durham, 1984, p.15.

しかし、近年、近代西欧教育一辺倒による弊害が論議され始めてきた。例えば、「伝統的価値観と全く相反する近代西欧教育に頼るばかりでは世の中に偽善がはびこり、社会不安が増大するばかりである。¹¹⁾」、「現教育制度によって導かれる社会はマルクス主義に代表されるドグマ支配の共同体である。¹²⁾」などの批判である。Syed Sajjad Husain と Syed Ali Ashraf によって著された *Crisis in Muslim Education* は、1977年にメッカで開催されたムスリム教育についての第一回世界会議において議論された問題を扱っている。彼らは、その中で西欧教育の結果、ムスリムの学生達の間には神に対する信仰を深めるどころか、イスラームに対して疑念を持つ者も見られると警告を発している。¹³⁾

サウジ政府はこうした伝統的価値観に反する思想の増殖を抑制するために、まず、最も西欧思考に洗脳されていると見なされる海外留学生の人数を減らすという政策をとった。¹⁴⁾しかし、こうした対症療法的な方法では、国内学生に対する措置になっていないばかりか、海外留学中の学生や帰国学生に対する評価や彼らの意欲にも悪影響を及ぼすばかりである。

こうした問題全般に対する予防療法的な方法として、教育改革がクローズアップされてきたのである。この教育改革は、これまでの西欧教育中心主義からイスラームを教育理念の基本とするという根本的な改革を意味する。¹⁵⁾換言すれば、伝統的教育でも近代西欧教育でもない新しい教育の確立である。Husain の本では伝統教育を第一教育、近代西欧教育を第二教育とし、この新教育を第一と第二を統合させた第三教育制度としてとらえている。¹⁶⁾彼らによれば、この新制度は伝統派と近代派の間の政治的緊張、また現在西欧諸国が陥っている苦境からの脱出をも可能とする。¹⁷⁾

しかし、今のところ、この教育改革がどのように行なわれるのか、また第三教育制度が実際どの程度実行されているのかは、確認できていない。いずれにせよ、サウジ国内においてこれまでの西欧教育一辺倒、ひいては西欧化に基づく国造りに対する反省が出てきていることは事実であり、大きな進歩と言えよう。

さて、知識層であり、国内の西欧化に対する反省の風潮に最も敏感であると思われる NMC の特性はどのように考えられるであろうか。Husain は、NMC は伝統的価値観を保持しつつも近代文明が提供する英知を受け入れることができるとしている。¹⁸⁾また、海外留学生たちも海外滞在中は女性の地位向上、職業観や能力重視という側面において西欧の影響を受けるが、¹⁹⁾西欧における物質主義、個人主義が招いた現状を見て、イスラームのもとに倫理的秩序が保たれている母国を再認識して帰ってくるのである。²⁰⁾以上から、筆者は NMC を「イスラームの近代人」と特性付ける。NMC はサウジ社会の問題点や可能性を意識し、積極的に国造りに参加していくと思われる。

2 New Middle Class による近代化の理想

近代化は第三世界諸国にとって非常に重要な問題である。長い帝国主義

下における抑圧からの実質的独立をはかるには、近代化により国力を増強し、自国の立場を貫けるようになることが必要である。中東諸国についても同じことが言えるであろう。第二次大戦後、植民地支配下からの再興をめざす国々にとって近代化を促進し、国民全体に利益を与えるような公正社会をめざす近代化はどうしても必要とされた。そして近代化は経済面、政治面、社会面において均衡を保ちながら推進される必要がある。政治、社会的側面に関して西欧諸国は歴史的に植民地主義を実践してきた。故に植民地支配からの再興をめざす国々にとって近代化は政治的、社会的意味において西欧化を示すものであってはならない。経済的側面について、中東産油諸国は他の第三世界諸国にない石油収入からの莫大な資金にまかせて急激に開発計画を遂行してきた。インフラストラクチャーの開発とともに石油枯渇後を見越しての国造りの基盤を完成する必要があったからである。

しかし、近年、第三世界においてこれまでの経済的、技術的近代化の進め方に対する疑念が起こってきた。サウジアラビアもその例外ではない。テクノロジーが未発達だった近代化以前のサウジアラビアにおいては、西洋の科学、技術を自国の近代化に導入するテクノロジー・トランスファーは便利で進歩的と思われていた。しかし、近代化が進行するにつれて西洋からのテクノロジー・トランスファーによる弊害が露呈され始めてきた。

第一に、テクノロジー・トランスファーの実態が真に国を富ませるために計画や投資が行なわれているというより、むしろオイルダラーの還流などの目的のために欧米に利用されている部分がある。自分たちが本当に必要とするものだけでなく、自分たちが中間テクノロジーを持っていないような先進テクノロジーに莫大な投資をする「買わされ近代化」では、均衡のとれた近代化計画とは言えない。

第二に、テクノロジー・トランスファーが非常にしばしば少数の仲介者

によって行なわれている。その仲介者は一部の政治的、経済的支配階級に限られ、トランスファーを行なうことによる利益が一般庶民に及ばず、貧富の差を増大させる原因となっている。

第三に、テクノロジーの発達によって西欧社会において人間疎外、精神病、社会的緊張、公害などの問題が発生している。もはや、19世紀後半から20世紀前半にかけてのように、西洋化が自国の進歩につながるということは必ずしも言えなくなってきた。

これらの弊害により、国民の中で特に高等教育を受けた NMC は純粋な西洋化による国造りに対する疑念を強めたのである。自国の現状に即さない「買われ近代化」でなく、自分たちが本当に必要とし、国民全体がその恩恵に浴するものだけを導入しなければならない。また、自国の進歩に必ずしも結びつかない西洋化を捨て、自分たちの伝統的価値観を見直そうという動きも起こっている。サウジアラビアの伝統的価値観は、もともと非西洋的でイスラーム的なものであり、西洋が直面している諸問題や西洋化を急激に推進して失敗したイラン革命の例などは、NMC にますます西洋化とのスタンスを与える自信を与えている。NMC は、西洋化に代わるべきものとしてイスラームの価値、原則の上に築かれる伝統的価値観に基づくイスラーム的近代化を推進しなければならないと認識したのである。

では、イスラーム的近代化とはどのような近代化を意味するのであろうか。科学やテクノロジーはイスラーム的近代化に反するのであろうか。西洋の学者の間には、イスラームを中世のもの、遅れたものと見なし、科学やテクノロジーの導入が伝統的価値観を混乱させるとの見方がある。しかし、およそ半世紀前にらくだしか乗り物を知らなかった砂漠の民が、自動車を初めて見て驚いた一面を把えて、イスラームは科学やテクノロジーを否定するであろうと思いつくのは時代錯誤の解釈である。「イスラームは

クルアーンの規定以外のものは正しい教えからの逸脱とみなす²¹⁾』という bid'ah 解釈は、ムスリムのイスラームに対する精神的な新しい態度に関するものであって、公正で社会的正義が実現されるような健全なサウジ社会建設に役立つものであれば、科学やテクノロジーは推奨されるのである。

NMC は、科学やテクノロジーを近代化のための道具と把握している。科学やテクノロジーは均衡のとれた近代化のためのものであって、オイル・ダラー還流のための投資であってはならないのである。NMC はその知識により、科学やテクノロジーを使用する際も、使用方法に関して社会的混乱を招かないように適切な判断を下すことができるのである。その際に必要となるのが、イスラーム的ウンマの社会福祉の概念であろう。彼らの究極の目的は、自分たちを含むムスリムすべてのための利益を創出できる公正なイスラーム社会の建設である。彼らは科学やテクノロジーを使っても、近代化のイスラーム社会への奉仕、精神的価値の部分については、固守すると思われる。この意味で、NMC は伝統的価値観を乱す世俗的な存在ではなく、むしろその主体においてシリアスで現実的なムスリムと言うべきであろう。

3 New Middle Class の政治的態度

政治的、社会的近代化については、サウジ支配層は消極的である。ファイサルにより国家機構はかなり整備されたが、それは民主主義化、自由化のためのものではなく、あくまでサウジ王制による支配を強化するためのものであった。その証拠に、合理化された統治機構の要所には依然として王族が配置されており、また政治参加の機会であるべきマジュリスも国民の意見を吸い上げ、政策に反映させるという本来の目的を果たしていない。サウド家は依然として絶対的な権力を誇っている。サウジアラビアの NMC は政治的、社会的近代化に関してはどのような態度をとっているで

あろうか。

John A. Shaw は NMC は広い範囲で政治思想に接することができるにもかかわらず、政治に無関心であると述べている²²⁾。また、Asaf Hussain も彼らは自分たちの階級の利益のために行動しようとはせず、経済力も政治的イデオロギーもないと述べている²³⁾。また、Peter Hobday は、政府に勤める NMC は民間会社への天下りの踏み台として自分の職場を考えていると紹介している²⁴⁾。この他、母国に魅力がなくなればそれまでに獲得した知識、技術を武器に外国で働くことや²⁵⁾最初のテクノクラートであった 'Abd Allah Tariki が、Stephen Deguid に言わせると、ただ単に高い地位にとどまっていたいが故に政府組織にいたことなど²⁶⁾NMC を個人主義、利己主義者にたとえ、このような class は政治化などしないという議論はかなりある。

しかし、サウジアラビア国内には体制が政治的危機に発展する契機がいくつ也存在する。Hrair Dekmejian はこうした危機の指標としてアイデンティティ・クライシス、レジティマシィ・クライシス、失政／強圧政治、経済危機、軍事的無能、そして文化的危機の6つを掲げている²⁷⁾。それぞれの指標について、サウジアラビアではどのような契機が考えられるか、以下考察する。

第一にアイデンティティ・クライシスについては、急速な近代化により村社会の崩壊、都市化の進行は実際に起こっている。伝統的部族社会が部族集団、血縁集団などの垂直的構造集団から次第に水平的な階層社会へ移行する過程において、人々は帰属意識を部族からサウジアラビアという国家へ容易には移せないでいる。依然として権力の源泉として伝統的部族社会の族閥主義や策動が働いているからである。また、サウジ王制も彼らの帰属意識を変化させるような社会分化の方策を積極的に行っていないからである。

第二に、レジティマシィ・クライシスについては、政治的近代化として非王族を国家機構に組み入れた合理的な王制の確立がはかられてきた。しかし、これはあくまで多様化する社会に対応しての合理化であって、決して国民の政治参加を働きかける民主化をめざすものではない。むしろ、その点に関してはサウジ王制は消極的で、統治機構の要職は依然として王族に握られているのが現状である。一方、アル＝シェイク家を中心とする宗教勢力は次第にその権力を失い、反体制勢力としてサウド家に圧力をかけるほどの力はない。

第三に、失政／強圧政治に関しては、王族の浪費、腐敗行為、また石油収入の適正な分配ができておらず、貧富の差が拡大していることが掲げられる。外交面については、イスラエルを援助しているアメリカとの関係、パレスチナ問題、イラン・イラク戦争への対応が問題となろう。

第四に、経済危機については、80年代に石油収入が急激に落ち込み、これまで不満足意見を迎える役割を果たしてきた種々の補助金を減額、廃止せざるを得なくなってきた。またこれまで人口の相当数を占めていた外国からの出稼ぎ労働者を帰国させねばならなくなり、その後の国民への職業配分の問題などが掲げられる（表-4）。

第五に、軍事的無能については、イスラエルやイランの軍事的脅威が実際のものとなったときに、サウジ軍の無力が暴露されるであろう。また、国内においては1979年のメッカ事件、その後のシーア派によるハサにおける暴動に国家警備隊がうまく対応できなかったことが判明している。²⁸⁾

最後に文化的危機については、石油産業の発展に伴って西欧との交流が深まり、西欧の文化がサウジ国内に進出してきた。留学生の中には部族の枠組を超えて結婚相手を選んだり、女性の労働参加の必要性を認識する者も出てきた。²⁹⁾ また、先進の科学やテクノロジーの流入は、伝統的価値観がそれに対応することができないほど急激であり、社会的混乱を引き起こす

表-4 サウジアラビアの国際収支、1974年—83年

(単位10億ドル)

	1974	1975	1976	1977	1978
貿易収支	29.1	21.3	25.2	25.7	17.0
輸出	32.7	27.3	35.6	40.4	37.0
(石油)	(32.6)	(27.2)	(35.5)	(40.2)	(36.8)
輸入	3.6	6.0	10.4	14.7	20.0
貿易外収支	- 6.0	- 6.9	-10.9	- 3.8	-19.2
経常収支	23.1	14.4	14.4	12.0	- 2.2
資本収支	-12.7	- 5.3	-10.6	- 9.3	- 4.5
合 計	10.4	9.1	3.7	2.7	- 6.7
海外資産残高	20.1	39.2	52.3	61.4	61.7

	1979	1980	1981	1982	1983
貿易収支	34.6	72.5	77.2	38.7	11.9
輸出	58.1	100.7	111.1	73.1	45.4
(石油)	(57.9)	(100.6)	(110.9)	(72.9)	(44.9)
輸入	23.5	28.2	34.0	34.5	33.5
貿易外収支	-23.4	-31.1	-38.8	-39.8	-30.4
経常収支	11.2	41.4	38.4	- 1.1	-18.4
資本収支	-10.9	-37.5	-28.8	- 1.2	-16.9
合 計	0.2	3.9	9.6	- 2.3	- 1.5
海外資産残高	64.8	94.4	141.8	157.0	148.5

(出所) 【これからの中東情勢と石油】中東経済研究所、1985、83頁。

結果となっている。流入するものの中には、明らかに伝統的価値観からの逸脱が問題となるものがある。メッカ事件はこうした不道徳に対する不満が一つの原因だったと言われているが、³⁰⁾今後もこのような文化的危機状態が続けば、それは政治的危機の契機となりえよう。

Mark Heller と Nadav Safran は、これら種々の危機がこれまで革命を起こすまでに至らなかった理由として、サウジアラビアの莫大な富、王族の規模の大きさ、そして広大な国土を掲げている³¹⁾。しかし、彼らの論文の中には、このサウジアラビアの特殊な条件をもってしても、他の国で NMC が中心となって旧体制を打倒してきたように革命は起こると述べられている³²⁾。果たして、サウジアラビアの NMC は革命の先導役となるのであろうか。上記の6つの危機に対する NMC の態度を考えると、近代化の産物、担い手としての NMC に深く関係してくるのは、アイデンティティ・クライシス、レジティマシー・クライシス、そして文化的危機であると思われる。他の3つの危機については、NMC 以外の国民と同じ立場であらう。

NMC は、そのアイデンティティにおいて部族、地域、宗派という伝統的要因を保持しつつも、近代化の担い手として功績、貢献などの要因を上位に置いている。彼らのアイデンティティは、経済的、技術的近代化の推進と合致するものである。そして、その近代化は現在、NMC によってイスラーム的近代化という伝統的価値観と科学テクノロジーのバランスを保つ形で推進されようとしている。この意味で、近代化は NMC にとってそれほどの文化的危機とはなり得ない。しかし、レジティマシー・クライシスについては、国民の間からもサウド家の絶対的権力に対する不満があり、NMC は今後、民主化運動の中心的役割を果たしていくと見られるが、現在、NMC は形成されてまだ日は浅く、サウジ王制の国民に対する譲歩を獲得するほどの勢力に成長していない。

以上、考察してきたように NMC は100%反体制勢力とは言えないまでも、反体制勢力の芽であることには違いない。サウジ王制は、NMC の理想とするイスラーム的近代化を進めることで、政治的民主化に対する無策ぶりに対する不満の矛先を変えるしかないのである。

Ⅲ むすび

イブン・サウドの国家統一、ファイサル国王による近代化と、1920年代から1970年代半ばまで、サウジアラビアは着実にその国造りを推進することができた。ファイサルの死以降、サウジアラビアの国造りの方向性はどこにその重点が置かれているのだろうか。

ファイサル王の指導のもとに始められた五か年計画をはじめとする経済の近代化は、イスラーム王国であるサウジアラビアにとって伝統的価値観を破壊し、革命の推進者となる NMC の台頭を導くとの議論を引き起こした。事実、対岸の国イランでは急激な西洋化を推進しようとしたシャー体制が、イラン革命によって打倒された。しかし、サウジアラビアの経済の近代化はシャー体制下の西洋化とは異なる。ファイサルの死後、第二次、第三次五か年計画の基本理念には、最初にイスラームの宗教的、道徳的価値を維持することが謳われている³³⁾。また、近代化の産物であり、担い手である NMC 自身、イスラーム的近代化による国造りの必要性を自覚している。彼らは健全にプラグマティックに、伝統的価値観にウェイトを置いて行動することを意識している。この意味で、サウジアラビアの NMC は経済的近代化の方法について、体制と衝突したり国民の混乱を招く class であるとは言えない。

しかし、政治的近代化については、現サウジ王制に真の意味での近代化の用意はあるのであろうか。省庁の整備、統治諸制度の組織化などを通じて、サウド家は国家機構の合理化を進めてきた。しかし、この合理化は実質的に国民に政治参加の機会を与えるものではない。経済的近代化により多様化する社会に対応するために統治制度が合理化されただけで、依然としてサウド王家はその特権階級の地位を維持している。この合理化は国民に政治参加の機会や自由を与える民主化ではない。NMC の出現によっ

てサウジアラビア国内にも、こうした民主化を伴わない政治的合理化に対して疑問を持つものがでてきた。もちろん、現在のところ、NMC に反体制勢力となるほどの力はない。しかし、彼らはいずれ反体制となる芽であることは間違いない。

サウド王制はこの動きにどのように対応しているのであろうか。現体制が行なっていることは、憲法制定、諮問会議の復活、議会の創設などを国民に約束して、とりあえず現状維持に務めているだけである。このようなリップサービスにより、国民の不満はメッカ事件などの契機があったにもかかわらず、王制打倒の革命にはつながらなかった。

しかし、中東にはサウジアラビアの安泰を脅やかす他の多くの要因、例えば外交的状况の変化などが存在する。イラン・イラク戦争の帰趨、アラブ・イスラエル紛争の経過など、サウジ王制の外交的姿勢が問われるような状況下においては、自国軍隊の無力さ、イスラエル支持のアメリカによる管理態勢が国民に暴露されるであろう。そしてこれまで抑えられてきた王家の近代化に対する遅い反応・無策ぶりに対する国民の不満が高まるであろう。NMC は、これらの不満が社会に蓄積したとき、ある種の動きの核となりうる。そして、この動きは他の階層を巻き込むことも十分考えられる。よって、NMC の発展・変化は内外との関連もあり、今後も注目していかなければならない。

注

- 1) ファイサル王治世下における政治的、経済的近代化については拙著、*Toward a Modern Islamic Kingdom: A Socio-Political Analysis of Contemporary Saudi Arabia*, The Institute of Middle Eastern Studies, I. U. J., 1986, 第二章参照のこと。この中で筆者はファイサルの業績を以下の5つとらえている。

- ①省庁の整備、統治諸制度の組織化、②宗教界の国家への統合、③テクノクラートによる経済の計画化、④王位継承の制度化、王族内部における権力の均衡化、⑤国内および中東地域双方から正当化される外交政策。
- 2) James A. Bill, "Class Analysis and the Dialectics of Modernization in the Middle East," *International Journal of Middle East Studies*, Vol. 3, 1972, p. 424.
 - 3) *Ibid.*, p. 433.
 - 4) ミルズは「支配階級」という表現について「階級」という経済用語が「支配」という政治用語と短絡的に用いられているという意味で批判しているが、サウジアラビアの場合は、政治的にも経済的にも支配階級と呼べるほど圧倒的な権力を誇っていた。C. Wright Mills, *The Power Elite*, London, Oxford, New York, Oxford Univ. Press, 1956, p. 277参照。
 - 5) William Rugh, "Emergence of a New Middle Class in Saudi Arabia," *The Middle East Journal*, Vol. 27, No. 15, Winter 1973, p. 7 参照。
 - 6) サウジ政府が発行している統計年鑑によると、留学生は1967年から75年にかけて193人が2,122人と急増した。67年においては、ヨーロッパの大学へ留学したものが46.6%、他のアラブ諸国へは37.8%、アメリカへはわずかに9.9%であった。75年にはヨーロッパが9.4%、アラブが48.0%、アメリカが40.1%となった。80年代以降は毎年留学生の約80%がアメリカに迎えられている。
 - 7) Rugh, p. 7.
 - 8) Bill, p. 433.
 - 9) Rugh, p. 11.
 - 10) Rugh, p. 12.
 - 11) Syed Sajjad Husain and Syed Ali Ashraf, *Crisis in Muslim Education*, Jeddah, Hodder and Stoughton, 1979, p. 13. 参照。
 - 12) Husain, p. 2. 参照。
 - 13) Husain, p. 3. 参照。
 - 14) サウジアラビアからの留学生の数は1977年に2,269名にも達したが、1981年には1,220名に減少した。
 - 15) Husain, p. 4. 参照。

- 16) Husain, p. 17. 参照。
- 17) Husain, p. 17.
- 18) Husain, pp. 15-16.
- 19) Abdullah Al-Banyan, *Saudi Students in the United States : A Study of Cross Cultural Education and Attitude Change*, London, Ithaca Press, 1980, p. 70. 参照。
- 20) Shirley Kay, "Social Change in Modern Saudi Arabia," in Tim Niblock, ed., *State, Society and Economy in Saudi Arabia*, London, Croom Helm, 1982, p. 82. 参照。
- 21) 黒田壽郎『イスラーム辞典』東京堂出版 1983年 33頁参照。
- 22) John A. Shaw, *Saudi Arabian Modernization: The Impact of Change on Stability*, Georgetown Univ., N.Y., Praeger, 1982 p. 83. 参照。
- 23) Asaf Hussain, *Political Perspectives on the Muslim World*, London, The Macmillan Press, 1984, p. 18. 参照。
- 24) Peter Hobday, *Saudi Arabia Today: An Introduction to the Richest Oil Power*, London, The Macmillan Press, 1978, p. 81. 参照。
- 25) Hobday, p. 89. 参照。
- 26) Stephen Duguid, "A Biographical Approach to the Study of Social Change in the Middle East : Abdullah Tariki as a New Man," *International Journal of Middle East Studies*, Vol. 1, July, 1970, p. 202. 参照。
- 27) R. Hrair Dekmejian, "Fundamentalist Islam : Theories, Typologies, and Trends," *Middle East Review*, Vol. XVII, No. 4, Summer 1985, p. 29. 参照。
- 28) James P. Piscatori, "Ideological Politics in Saudi Arabia," in *Islam in the Political Process*, ed. by James P. Piscatori, Cambridge, Cambridge Univ. Press, 1983, p. 67. 参照。
- 29) Rugh, p. 17. 参照。
- 30) Saad E. Ibrahim, *The New Arab Social Order*, Boulder, Colorado, Westview Press, London ; Croom Helm, 1982, p. 111. 参照。
- 31) Heller, p. 16. 参照。
- 32) Heller, p. 27. 参照。

- 33) John Townsend, "Philosophy of State Development Planning," in *The Impact of Oil Revenues on Arab Gulf Development*, ed. by M. S. El-Azhary, London and Sydney, Croom Helm, Boulder and Colorado, Westview Press, 1984, p. 48.

The Role of the New Middle Class in the Modernization of Saudi Arabia

by Yukihiro TAKABAYASHI

Saudi Arabia steadily proceeded with its nation building from the 1920s to the middle of the 1970s through the unification work of Ibn Sa'ūd and the political economic modernization of King Faisal. Since the death of Faisal, in which direction has Saudi Arabia been moving?

Economic modernization, which began under the leadership of King Faisal in the form of the Five Year Development Plan, invited predictions by western scholars that rapid economic modernization would destroy the traditional values of Saudi Arabia and that the New Middle Class, the supposed propellers of revolution, would gather strength. In fact, the regime of the Shah of Iran, which had pursued pure westernization, was overthrown by traditional powers. However, the economic modernization of Saudi Arabia is different from the Shah's westernization. As a first principle of the Third Development Plan (1980—5), the government advocated "the dedication of the government to upholding Islām and maintaining its associated cultural values". Moreover, the New Middle Class, who are the product and promoters of economic modernization, have realized the necessity of 'Islamic' modernization. They have tried to proceed with economic modernization by making pragmatic use of traditional values. pragmatically. In this sense, it is impossible to say that the New Middle Class disagrees with the government in its promotion of economic modernization and causes

social confusion.

However, as for political modernization, is the present Saudi monarchy really prepared for it? Although the Saudi monarchy has rationalized its ruling system through the consolidation and systematization of the ruling system, rationalization has not given people the opportunity for political participation. The Saudi monarchy rationalized its ruling system to help cope with a diversified society, one of the results of economic modernization, but Āl al-Sa'ūd (the House of Sa'ūd) still occupies the position of a privileged class. Rationalization is not democratization which gives people freedom. The New Middle Class has started to doubt this rationalization which is not accompanied by democratization. Although the New Middle Class is not strong enough to become an anti-Establishment force, it is certain that the New Middle Class contains the bud of an anti-government feeling.

How does the Saudi monarchy cope with this doubt? The monarchy simply tries to maintain the status quo by promising a written constitution and a revival of the Consultative Council which existed in Hijaz. This kind of lip service could have so far prevented the discontent of the people from developing into revolution, even though there have been some chances such as the Mecca incident. However, instability in Saudi Arabia could be caused by many other factors in the Middle East, for example, by the change of diplomatic conditions. The expansion of the Iran-Iraq War and the process of Arab-Israeli conflict might put the Saudi monarchy in a position where by its diplomatic attitude would be noticed and severely criticised, by the Saudi people. Under such circumstances, discontent might be strengthened by the following: the impotence of Saudi military power; the protection by the United States which supports Israel; and the lack of a

policy for political modernization. The New Middle Class could then be the nucleus of a movement arising from these grievances. It is possible that other people will also be involved in the movement. Therefore, the development and the transformation of the New Middle Class in connection with the domestic and foreign setting are worth noticing.